（別紙１）《会派用》　　令和５年１１月２日

狭山市議会議長
三　浦　和　也　　様

会　派　名　　健政会
代表者氏名　　太　田　博　希　[redacted]

視　察　報　告　書

このことについて、別紙のとおり、報告がありましたのでご報告いたします。

受付
第 389 号
-5.11.-2
狭山市議会

（別紙７）《会派用》　　令和５年１１月２日

代　表　者　　太　田　博　希　　様

視察者（代表）氏名　　酒井　英男 [redacted]

視　察　報　告　書

このことについて、次のとおり報告します。

１　期　　間　　令和５年１０月１１日～　令和５年１０月１３日（２泊３日）

２　視　察　先

（１）岩手県九戸郡野田村

（２）青森県八戸市

３　調 査 事 項

（１）東日本大震災後の取り組みについて

（２）第85回全国都市問題会議

４　視察参加人数　８人

参加者は次のとおり

太田博希、笹本英輔、酒井英男、豊泉正人

福田　正、千葉良秋、町田昌弘、三浦和也

５　調 査 概 要

別紙のとおり

（別 添）

調 査 概 要

●日　時：令和5年10月11日

●視察地：岩手県九戸郡野田村

●視察目的

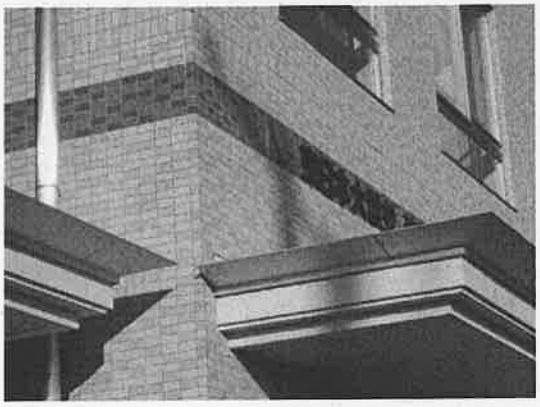
野田村の東日本大震災伝承施設や震災遺構をめぐることで、その村の復興状況や伝承を直に目で見て肌で感じる事を目的とします。

～東日本大震災を忘れず、この地には住宅を建設しない～

野田村駅から国道 45 号線沿いに造成された、東京ドームおよそ4個分・長さおよそ 2 キロにわたる広大な敷地の「十府ヶ浦公園」を車窓より眺めながら、「ほた展望台」駐車場より外景を視察しました。この敷地内には、多目的イベント広場や多目的活動広場などが整備されています。また、津波防災緑地・第 3 堤防として整備された遊歩道（盛り土）で繋がっており、担当者から「東日本大震災を忘れず、この地には住宅を建設しない」との説明を受けました。

● 野田村保健センター

野田村保健センターの入口には、津波浸水位が表示されていて、その高さには驚かされます。なお、この建物は再建した保健センターと津波避難ビルとの複合施設となっており、野田村復興展示室は保健センターの3階に位置しています。



●復興展示室のジオラマ模型

3階の復興展示室は、震災による被害状況や教訓、復興の足跡を将来に語り継ぐための展示施設となっており、被災から復興までの様子を、映像やパネルで紹介しています。
写真の野田村のジオラマ模型は、被災前の村の状況が描かれていました。

東日本大震災

2011年(平成23年)3月11日、午後2時 46分に発生した東北地方太平洋沖地震は、国内観測史上最大のマグニチュード9.0を記録し、それに伴って発生した大津波により本村では犠牲者37人(うち村民28人)、住宅3分の1の515棟(うち全壊311棟)、漁業、商工業などに甚大な被害をもたらしました。

●パネルの展示

津波から市街地を守るポケット状の都市公園を整備

防災まちづくりの一環として津波防災を目的としたポケット状の都市公園を計画し事業認可を受けました。津波の衝撃を和らげる区間の整備と高盛土による津波のエネルギー軽減、避難時間の延伸を目的に整備がなされています。

●心の復興支援

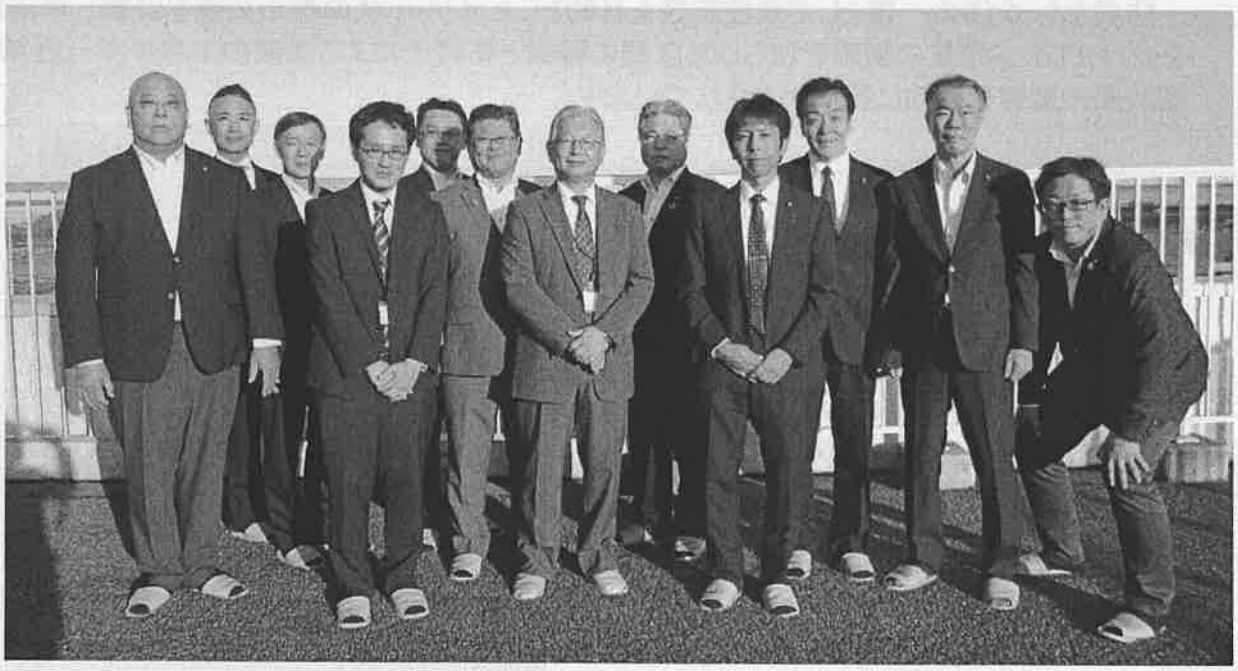
また震災後に発見された引き取り手のない多くのアルバムには、人々の美しい思い出がたくさん詰まった状態できれいに保管されていて、心の復興支援活動の一環となっているようです。

屋上より思いを偲ぶ

当時の津波映像を見てから、屋上より外の景色を眺めながら当時の状況や復興の状況などについて個々にお話をお伺いしました。

今回の視察は、あらためて市議会議員として「災害に強いまちづくり」をハード面・ソフト面の両面から深く考える契機となりました。

今後も調査や研究を継続し、政策に活かしていきたいと思います。



1. 会 議 名　第85回全国都市問題会議
2. 議　　題　文化芸術・スポーツが生み出す都市の魅力と発展
3. 主 催 等　主催　全国市長会
　　公益財団法人 後藤・安田記念東京都市研究所
　　公益財団法人 日本都市センター
　　八戸市
　　協賛　公益財団法人 全国市長会館
4. 会　　場　八戸市公会堂・公会堂文化ホール
5. 参加者数　1，810名
6. 会議日程

【第1日】10月12日（木）
●開会式 開会挨拶
●基調講演
アートの役割って何だろう？
東京藝術大学長、アーティスト 日比野 克彦 氏
●主報告
八戸市の文化・スポーツによるまちづくり
青森県八戸市長 熊谷 雄一 氏
●一般報告
・まちづくりの活力は地域に根ざした文化政策から育まれる
　文化事業ディレクター、演出家 吉川 由美 氏
・標高差 1,500mの地勢を活かしたスポーツ・ツーリズムの創出
　長野県東御市長 花岡 利夫 氏
・まちづくりにおけるプロスポーツクラブの有効活用
　株式会社鹿島アントラーズ FC 取締役副社長 鈴木 秀樹 氏

【第2日】10月13日（金）
●パネルディスカッション
●閉会式
次期開催市市長挨拶
兵庫県姫路市長 清元 秀泰 氏
閉会挨拶
公益財団法人日本都市センター理事 奥山 恵美子 氏

【1日目】10月12日(木)

●9時30分　開会式

開会挨拶　全国市長会会長　福島県相馬市長　立谷秀清

開催地市長挨拶　青森県八戸市長　熊谷雄一

来賓祝辞　青森県知事　宮下宗一郎(ビデオメッセージ)

●9時50分　基調講演　アートの役割って何だろう？

東京藝術大学長　アーティスト　日比野克彦

国際博物館会議(ICOM)が昨年、博物館、美術館の定義を更新した。1946 年に制定された定義では、「ここにいう博物館とは、公開することを目的とする芸術、科学、技術、歴史および考古学資料のすべての蒐集品と、動物園、植物園を含むものとする。ただし、常時の展観室を備えていない図書館を除く。」と、されており、その後、6 回に渡り定義は改正されている。

博物館は、有形及び無形の遺産を研究、収集、保存、解釈、展示する、社会のための非営利の常設機関である。博物館は一般に公開され、誰もが利用でき、包摂的であって、多様性と持続可能性を育む。倫理的かつ専門性をもってコミュニケーションを図り、コミュニティの参加とともに博物館は活動し、教育、愉しみ、省察と知識共有のための様々な経験を提供する。

アートは生きる力であり、アートとは、多様性のある社会を築く基盤であって、社会的な課題に対して持続的に取り組み続けていくには大切なものである。人の心を動かすことはアートの機能、役割、特性ともいえる。近代社会において人は時間、空間と対峙し、短時間に大量に物資を、情報をコントロールし続けており、その進化の線上には、さまざまな社会的課題が発生する起因ともなっている場面も少なくない。これらの課題に対してのアートの特性を活用することができるのではないか。

今ではない未来の姿を想像する力、ここではない場所を想像することができる力、一人ひとりの差異を、違いを否定することなく、そこにいることを排除しないという感覚。これらのアートの特性を、現在社会を構築していく中での、基盤に捉えていくことができていく社会を想像してみよう。大きな力が世界を動かすのではなく、一人ひとりの小さいけれども、確実にある、少しずつ異なった多様な想いが、時代を変化させていくような気がするなどと語られた。

また、さまざまな活動の中で、朝顔を育てることで、地域のコミュニティを育み、収穫された種を通して人や参加地域をつなぐ明後日朝顔プロジェクト。2005年に水戸美術館で開催した「HIBINO EXPO 2005 日比野克彦の一人万博」展を機に苗平から苗を譲り受け水戸でもスタート。以降、全国に広がった取り組みを紹介した。

その他、香川県の三豊市では、2010 年から、地域の人々との交流を通じて文化芸術による地域の活性化を目的とした芸術家プログラム。総合ディレクターの日比野克彦氏が校長を務め、粟島芸術家村(旧粟島中学校)を拠点に、毎年滞在した作家が島から見える視点を軸に創作活動を行っており、島民やボランティア団体「粟島ぼ～い&が～るの会」など多くの方々が制作に関わり、その制作過程も見る人を楽しませている取り組み、熊本県熊本市では、日比野克彦氏に「熊本市文化顧問」を委嘱し、アートの視点を行政の発想転換に活かすなど全国で活躍している状況、また、大学のプロジェクトなどの紹介があった。

日比野氏は、アートで人が連携すると地域と地域が繋がり、人と人とが繋がる。
人が集まると会話が生まれる。この活動をアートと捉えて、市民の多様な価値観や眼差しを大きなテーマとして取り組む。単に展示された美術・音楽・演芸などを観に行くだけではないと語られていた。

●11時00分　主報告　八戸市の文化・スポーツによるまちづくり
八戸市長　熊谷雄一

冒頭、八戸の紹介をされ、八戸市は、太平洋を臨む北東北東岸に位置し、人口約22万人の中核市である。1929 年市制施行以来、全国有数の水産都市として、また、東北有数の工業都市、国際物流拠点都市として着実な発展を遂げてきた。
八戸三社大祭の山車行事などの伝統文化、三陸復興国立公園内にある種差海岸の美しい自然景観、食では脂の乗った八戸前沖さばや B-1 グランプリでゴールデングラ

ンプリを獲得した八戸せんべい汁、さらには、中心市街地の昭和の風情漂う夜の8つの横丁などは、八戸市が誇る貴重な地域資源である。
その他市内各所において、様々なアートプロジェクトに取り組む中で、アーティストの発想とプロジェクトに参加する地域の人々とのコラボレーションを通じて、それまでにない形で地域の資源に光をあて、新たな魅力を見直し、発信した。

・文化によるまちつくり

2011 年、新たな交流と創造の拠点として開館した、八戸ポータルミュージアム「はっち」、地域資源の魅力を創出・発信し、文化芸術、産業、観光、市民活動、子育て支援といった各施設を一体にした施設としてオープンした。

本会議の議題解説で紹介された「酔っ払いに愛を～横丁オンリーユーシアター」も「はっち」が取り組んだアートプロジェクトの1つである。

多種で自主的な市民による文化活動が展開され、中心市街地活性化という地域課題に民間事業者の協力による文化とまちづくりの連携が図られた。

その場に行かなければ得れないもの、出会えない人やコトが集まる場を、市民が観客としてではなく、当事者として自らも参加したり、創造したりできる形でつくることが、「はっち」の運営のキーコンセプトであり、同様のコンセプトとして、八戸ブックセンター、八戸まちなか広場（マチニワ）、八戸市美術館と目的や役割が異なり、市民等の多様なニーズに応えられる文化施設を公共交通網の整備と併せながら、歩いて回遊できるエリアに整備し企画事業を市民と共に展開してきた。

未だ空きビルが発生する都市機能再編の途上にあるとはいえ、これらの文化施設の周辺において再開発事業等への連鎖につながったことは、公共の文化への投資が、民間による都市機能再編への投資を呼び込んだものといえる。

・スポーツによるまちづくり

古くからスケートが盛んであり、スケートは八戸の風土が育んだ文化といえる。氷都八戸を象徴し、市街地にあるリンクとして、全国的に著名な「長根リンク」が老朽化し、2019 年に、長根公園内に整備を進めてきた長根屋内スケート場「YS アリーナ八戸」をオープンした。

市の直営で国際大会も可能であり、災害避難所や備蓄品の保管にも活用する。
来年 2 月には初めての国際大会が開催される予定である。

通常はアイスリンクでありながら、半日でバスケットコートに転換可能な民間施設フラット八戸 FLAT HACHINOHE も 2020 年にオープンした。

サッカー、アイスホッケー、バスケットボール、3x3 の 4 種類の地域プロスポーツチームが八戸を活動拠点としている。

八戸スポーツコミッションを立ち上げ、「する」「みる」「ささえる」スポーツの各シーンにおいて、市民による多様な関わり、楽しみや活躍、学の場を提供している。

・文化の力、スポーツの力

持続的な取り組みにおいて、拠点があることは重要であり、公営のブックセンターは、書店機能を持つ「本のまち八戸」の拠点施設である。ブックセンターの取り組みの1つに、地元の民間書店間のネットワークづくりがある。全国の個性的な書店から講師を招き書店員の学びと情報交換の機会を作ったり、本のイベント「本のまち八戸ブックフェス」を共同で実施したり、地域の書店が共に盛り上がる取り組みを実施したりしていて、今では本を介した人とのつながりを生む「本のまち八戸」に欠かせない存在であるなどの声が寄せられている。

公共の施設が専門人材という人的資源を持ちながら、ハブとなる持続的な拠点として、まちにコミュニケーションの新たな回路をつくり、ネットワーク化すること。そのことが、内需経済のプラスを生み出しながら、「地元民間書店」という地域資源を生かすことにつながっている。また、プロスポーツによるスクールや独自の競技会の開催をはじめとした持続的な地域貢献活動は、チームが活動拠点を構え、地元企業や地域とのパートナーシップを育むことを通じて実現している。

・関心やテーマに基づくコミュニティと当事者を増やすこと

はっちの事業としてスタートした市民集団「まちぐるみ」などの新しいスタイルは、若者をはじめとして新しい人を惹きつける。また、八戸美術館は、アートでコミュニティを耕し、地域社会のことを考えアーティストと共に創作活動に取り組む市民を「アートファーマー」と呼び、市民が主体的に美術館運営に関わることや、地域とのつながりを生み出すことを目指している。

スポーツでは、各プロスポーツチームが取り組む育成チームやスクールへの小中学生等の参加を通した親子同士のつながりや、チームを支えるブースターやファン同士

のつながりは、新たなコミュニティである。さらには氷都八戸パワーアッププロジェクトにおける従来の競技者等の子ども達や指導者としての奮闘ぶりや、プロスポーツチームにおける選手やそのセカンドキャリアとして取り組む地域貢献などでは、地域づくりに関与する当事者の姿である。
多様化するライフスタイルのさまざまな段階において仕事や家庭と別のサードプレイスで、社会と関われる、まちづくりに関与することができる、多様な選択肢がある地域社会づくりを目指していくことが必要であり、文化・スポーツはそのためのシーズを大いに提供してくれる。たとえ定住人口が減ったとしても、活動を通じて地域づくりに主体的に関わる人、すなわち地域づくりの当事者が増えれば、町は豊かになるはずである。

・今後の展望

効率や成長を重視することから、熟成社会への価値観の転換を前提としたまちづくりのあり方の1つとして、互いの顔や活動が見える空間づくりにより、コミュニティ感覚を醸成し、そこで誘発される交流からよりよい社会をつくりイノベーションが生まれるきっかけになれば良いと考えている。また、そのことは、社交、スポーツを含めた文化の享受、リラックスなど、都市に元々備わっていた多様な価値を取り戻すことでもある。多くの価値が集積してこそ人は歩きたくなる。文化とスポーツは、元来、内に閉じるのではなく、他者と交わり外へ開いていく性質を持つものであり。そのようなまちづくりにピッタリではないだろうかと語られた。

感想

文化芸術の創造性を活かした「アートのまちづくり」を推進し、地域資源を活用した市民参加型の事業を展開し、八戸市美術館、本のまち八戸として、八戸ブックセンターを拠点に、本との出会いや本を介した市民交流を創出する事業を展開し、さらには八戸ポータルミュージアム「はっち」では、年度 2,000 件を超える市民等主催の文化芸術活動が行われており、市民の文化芸術への関心が高く、多くの市民が豊かな人間性や創造力、感性を育むことができるよう、市民が文化芸術に触れることができる機会の創出していることを強く感じた。

また、一年を通して、バスケットボールやサッカー、野球、スケートなど多くのスポーツが市民に親しまれ、スポーツの持つ価値を活かしたまちづくりを進めてているなど、語られた八戸市の取り組みは、本市としても大変参考になり、今後の市政に活かしていきたいと感じた。

●13時10分　一般報告

まちづくりの活力は地域に根ざした文化政策から育まれる

文化事業ディレクター　演出家　吉川由美

文化事業ディレクター、演出家の吉川由美氏による「まちづくりの活力は地域に根ざした文化政策から育まれる」では、まちのリノベーションと「はっち」の誕生、「はっち」のアート・プロジェクト、地域社会の分母としての文化をみんなで見出す、危機と文化、地域の活力と魅力ある源泉は地域の文化などについて語られ、市民を主役にした取り組み、中心街をみんなの関心空間にする、地域の資源の価値をみんなで見出すということが印象的であり、まさにまちづくりの活力は地域に根ざした文化政策から育まれるということを実感させられた講演だった。

14時30分　一般報告

標高差1，500mの地勢を活かしたスポーツ・ツーリズムの創出

長野県東御市長　花岡利夫

地域に潤いをもたらすとともに住民の健康長寿への取り組みに寄与できるよう、スポーツ・ツーリズムを推進

高地トレーニングのエビデンスを健康づくりにスポーツツーリズムとワインツーリズムを創設、千曲川ワインバレー特区の推進、湯の丸高原スポーツ交流施設「GMO アスリーツパーク湯の丸」の整備したことについて、花岡市長が語られた。

標高、1750m の湯の丸スキー場跡地に陸上トラックと水泳プールを建設し、今ではその施設でトレーニングしたトップアスリートが世界で活躍している。

湯の丸は「高地トレーニングの聖地」として多くのアスリートに認知されてきており、使用される競技団体も多様な広がりを見せ始めている。

長野県東御(とうみ)市は、標高 1,750m の湯の丸高原内に「高地トレーニング用プール施設」建設のため、日本水泳連盟とともに誘致活動を推進してきた。

トップアスリートは様々なリスクを負いながらも、競技力向上のため、海外での高地トレーニングに臨んでる。安心・安全な国内での練習環境が整えば、高地トレーニングもより多くの選手に取り入れられ、選手個人の競技力向上はもとより、選手層強化にもつながっていく。

東御市は水泳施設だけでなく陸上施設、屋内運動施設、宿泊施設を含む「湯の丸高原施設整備基本構想」を推進し、スポーツ選手の応援と地域の発展を目指した。

「なんとか日本で高地トレーニングができないものか？ しかも、どこからでも楽に行ける場所で」そんな要望に応えたのが“GMO アスリーツパーク湯の丸（湯の丸高原スポーツ交流施設）”です。日本の中心に位置する長野県の東御（とうみ）市にあるので、東からも西からも無理なくアクセス可能。東京との距離は約 200km。北陸新幹線や上信越自動車道が利用でき、移動時間は最短で 2 時間 30 分である。

日本陸上競技連盟や日本水泳連盟など競技関係者のかねてからの想い「日本人アスリートは日本で育てよう。」を受けてできた、この GMO アスリーツパーク湯の丸。日本でいちばん高い所にある 400mトラック、国内唯一の高地トレーニング用屋内プールが整備され、その他にもいろいろなトレーニングメニューが組めるバリエーション豊かなランニングコースやトレーニングルームなどもあり、日本屈指の高地トレーニング環境が整ってる。

高地トレーニングが行われるのは、標高 1500～3000m の高所です。標高が高い場所は酸素の濃度が薄いので、人間のカラダは酸素を取り込みにくくなり、血中の酸素飽和濃度（SPO2）が低下する。すると、カラダは酸素濃度を確保するために、体内で赤血球数やヘモグロビン、ミオグロビンの濃度を増やすのです。このカラダの適応能力を利用するのが高地トレーニング。血液中の酸素を体内に運ぶ能力と、筋肉内で酸素を効果的に利用できる能力をアップさせる。これが持久力の目覚ましい向上につながるとのことで、高地トレーニングといえば、アメリカ アリゾナ州のフラッグスタッフやコロラド州のボルダーなどが有名で、日本のアスリートがよく利用している。また、ケニアのイテンは、世界から多くのトップアスリートが練習にやってくるランニングの聖地。標高 2300m の高地にあります。一方で、拠点指定を受けている日本の高地トレーニング施設は、標高 1000m の蔵王坊平アスリートビレッジと、標高 1200m～2200m の飛騨御岳高原トレーニングエリアの 2 ヵ所であった。そして、新たな高地トレーニングスポットとして、GMO アスリーツパークが長野県 東御（とうみ）市の湯の丸高原に誕生した。

陸上や水泳のトレーニングができる場所であり、標高は1,750m。1750という数字は、専門家によると高すぎず低すぎず、アスリートが高地に馴化するのに適した高さとのこと。この最適地に、GMO アスリーツパーク湯の丸トラック（全天候型 400mトラック）や 800m の林間ジョギングコース、全長 2500m のトレイルランニングコースをつった。400mトラックは日本でいちばん高い場所に位置するトラックであり、また、屋内運動施設である GMO アスリーツパーク湯の丸屋内プール（50m 特設プール）は我が国初の高地トレーニング用プール。8レーンで深さは2m。湯の丸から 100 人のトップアスリートを生み出したい。そんな想いが施設全体にみなぎっている。

ここ東信州で充実した機能をもつトレーニング施設は、GMO アスリーツパーク湯の丸だけではなく、東御（とうみ）市の隣に位置する小諸市の総合運動場にあるのは、全

天候型 400m トラックを備えた陸上競技場。標高は 1000m。その隣の佐久市には佐久総合運動公園陸上競技場がある。これは日本陸上競技連盟公認の競技場です。陸上合宿やラグビーで有名な菅平高原は、東御市に隣接する上田市にあり、標高 1400m 付近にマラソンコースなど3つのコースを持ち、短距離ランナーは陸上競技場でのトレーニングも可能である。

高地トレーニングで効果が上がるのが、1500～3000m の標高だといわれています。GMO アスリーツパーク湯の丸の標高は 1,750m、最適な高さです。ただ、高地トレーニングを始めて経験する選手やジュニアなどは 1000m 程の標高が適しているといわれます。また、最近では、高地と平地でのトレーニングを組み合わせたメニューも有効とされているのです。そんな様々なトレーニングのバリエーションに応えられるのが、ここ東信州エリアのトレーニング施設。湯の丸、小諸、佐久、上田菅平がタッグを組み、総合力でアスリートたちを支えている。

東御市の花岡市長の報告は、信念をもって臨んだ事業を成功させ、反対していた市民にも認められたという、素晴らしい内容であった。

●15時30分　一般報告

まちづくりにおけるプロスポーツクラブの有効活用
株式会社鹿島アントラーズFC取締役社長　鈴木秀樹

プロ野球は都心から30キロ以内に地域人口 200 万人が、サッカーは 100 万人が常識であり、鹿島では99％無理だと言われてきたが、「鹿島アントラーズを J リーグに」を合言葉に、様々な施策を展開し、今日に至った。

今では、プロスポーツは稼げるものとなったが、地域との関わりをどのようにしていくかが大きな課題であると語らえらた。

J リーグが開幕して30年、その中で、地域との関係を持っているプロスポーツは、100 を超えている。ほとんどが複数の地域との関係を持っているので 300～500 くらいの自治体で何らかの関わりを持っていることになる。

鹿島アントラーズは、周辺地域17の自治体と連携しており、人材交流による行政連

携として職員がアントラーズに出向し、企業のノウハウなど自治体とは異なる多くの経験や知識を習得できる。出向職員は、その実績を自治体運営に活かせるなど、人材育成に貢献し、また、地域の社会課題解決へ向けての取り組みも行っている。

自治体側から見たプロスポーツの活用方法としては、スタジアムでの特産物の配布や販売、そのほか選手を呼んでサッカースクールをやったりすることが一般的であるが、プロスポーツは地域に豊かさをもたらすものと考える。

データ活用の取組例としては、全試合でいろんなアンケートを取っており、その中で、自治体のアンケートにも利用してもらっている。クラブのビジネスノウハウに活用してもらうことやチケット購入者の情報などを通じて、自治体としても大きな情報として活かされている。

また、地域の病院の開設や抱えているトレーナー(理学療法士)を活用することで地域医療に貢献するなど、スポンサーの力を借りてプログラミング教育を実施するなど様々な取組みが展開している。

結果として、鹿嶋市総合計画には、アントラーズは地域を代表する地域の資源と記載され、通常一企業のためにふるさと納税はしないのだが、地域の資源とされ実施されている。「モノではなくコト(試合を見に行ける、選手と何かができる)」の返礼品をふるさと納税型クラウドファンディングで実施されている。

鈴木氏の講演は、非常に興味深く、自治体運営に対して多くのヒントがあり大変参考になった。

鈴木氏は、全国に広がるプロスポーツクラブは地域の姿やあり方そのものを変える力になるなど、「人に会うまちづくり」、「人を中心としたまちづくりへ」、「一人ひとりが輝く地域になる」、「地域で新たなチャレンジをする」、「行政が後ろで風を送ってあげる」、「魅力ある地域の鍵となる人づくりを推進する」などのキーワードを語られ、特に、自治体運営は、とんがった、変わった、おもしろい先進的な取り組みをすることが、これからは必要だと語られたところが印象的であった。

【2日目】 10月13日(金)

●パネルディスカッション

テーマ:文化芸術・スポーツが生み出す都市の魅力と発展

《コーディネーター》

東京大学大学院人文社会系研究科教授 小林 真理 氏

《パネリスト》

合同会社 imajimu 代表取締役 今川 和佳子 氏

拓殖大学商学部教授 松橋 崇史 氏

静岡県沼津市長 賴重 秀一 氏

京都府綾部市長 山崎 善也 氏

① コーディネーターおよびパネリストが 1 人ずつテーマに沿って自身の活動についての説明がなされました。要点について以下に記載する。

小林真理 東京大学大学院人文社会系研究科教授

「文化行政」とはどのような領域を表すのか、自治体文化行政の発展と展開について説明がなされた。文化観光推進法(2020 年)では「文化の振興を、観光の振興と地域の活性化につなげ、これによる経済効果が文化の振興に再投資される好循環を創出するものとする」と位置付けられている。これまで教育委員会で主に住民個人の学習や住民間のつながりの熟成に活用されてきた文化領域が、観光・まちづくりへと面的、空間的、境界を越えて展開されるようになってきた。ようやく文化の価値が広く認められ、不可欠な公共サービスとして再認識されるようになってきた。特質について以下に項目で記す。

・地域社会の文化(スポーツ振興を含む)という空間的・集団的アイデンティティという新しい視点を導入したこと。

・地域独特の多様な文化的・歴史的特性を発見し、その存在を再確認したこと。

・地域の文化振興は市民主体で実現可能である事がクローズアップされたこと。

・行政の文化化(行政の政策形成や事業実施のありかたを見直す)

・「協働」という新たな概念、「人を育てる」「企業との成長」

・資源としての文化の掘り起こしや地域に「推し」をみつける。図書館や美術館が衰退する中心市街地

の活性化の一部を担っていること

も稀ではなく、文化ホールも公演をおこなっている時だけ人が集まる単なる上演施設ではなく、若者や高齢者の可能性を引き出す場にもなっている。

それは観光化ではなく本来の機能を原則に立ち返って問い返し、何を継続させて、さらに進化させていくかという視点から捉えられた結果であり、むしろ文化の本来的な価値や機能に気付いたといえる。

今川和佳子　合同会社 imajimu 代表

「八戸の独自性が生み出してきたもの」

2011年2月　八戸ポータルムージアム「はっち」をコーディネイト。全国でも例を見ない施設と言われた「はっち」は、美術館でも公民館でもない、複合的な機能を持つ施設である。それは、「貸館事業」「自主事業」「会所場づくり事業」の3つのソフト事業軸を持ち、特に自主事業に関しては、観光からアートまで、歴史・伝統をテーマにしたものから現代のものまで多岐にわたる。そして全体を貫いているのが「八戸という地域を再発見する」という視点であると話す。

さらに、まちをフィールドにした様々なアートプロジェクトへの取り組みについては以下の項目のとおり。

・「八戸レビュー」「八戸のうわさ」といったコミュニティアート
・「酔っ払いに愛を　横丁オンリーユーシアター」
・「デコトラヨイサー」
・「はっち流騎馬打毬（きばだきゅう）」など

アーティストと市民×八戸ならではの文化のかけ合わせにより無数の発見と人のつながりができた事、またアーティストやアートが人と人を出合わせ、人間関係を再構築できたことがとても印象深い話でした。

松橋　崇史氏　拓殖大学商学部教授

「地域活性化におけるスポーツの役割とその変化」

地域活性化とスポーツが関連付けられて語られるようになってから20年以上が経過した。プロスポーツクラブの創設・育成、スポーツイベントの誘致・開催、集客施設の開設・運営など全国各地で多くの取組みがおこなわれるようになった。Ｊリーグでは「地域密着」を掲げ、クラブ名を「地域＋愛称」にし、FC東京、川崎フロンターレは徹底した地域活動を実施する事で地元サポーターを増やし親会社に依存しない経営モデルを構築した。

また、国体を契機とした地方都市のスポーツを生かしたまちづくりでは、ホッケーのまちとして、岩手県岩手町、富山県小矢部市、福井県越前町、島根県奥出雲町、岐阜県各務原市などはレガシーによって施設と競技者指導ノウハウが充実した。フェンシングのまち静岡県沼津市は東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会参

加国の合宿誘致の取組を契機に日本フェンシング協会と包括連携協定を結び、新しいタイプの行政主導の「スポーツのまち」を形成しつつある。。次に、プロクラブと自治体の連携、地域活性化に関しては、北海道日本ハムファイターズとＪリーグ　鹿島アントラーズを例に、またトップクラブの活躍については、秋田県能代工業のバスケットボール部や釜石市の新日鉄釜石ラグビー部について地域の応援や歓喜にチームが応えている事について話された。

東京 2020 大会開催決定以降、国内ではパラスポーツが一気に身近になった。

多様な人々の活躍を目指す地域にとっては、多様な人々のスポーツ実施環境を構築する事は重要な課題になりうる。ホストタウンイニシアティブでは、533 もの自治体が登録して様々な活動をおこなった。特にパラリンピックに参加するアスリートとの交流を行うことで共生社会関連の政策推進や地域社会の課題解決を図ろうとした。このように、スポーツにあらたな価値を付与することを通じて、さらに地域活性に活かす視点が重要であることを教えられた。

頼重　秀一　静岡県沼津市長

スポーツとアニメを活用したにぎわいの創出

沼津市では、恵まれた海岸線エリアと兵陵エリアなどバラエティに富んだスポーツエリアを数多く有している。Ｊリーグクラブ「アスルクラロ沼津」ホームスタジアムや「香陵アリーナ」（沼津市総合体育館）、「F3BASE」（フェンシング交流拠点施設）、「DKFREERIDE MTB PARK」（マウンテンバイク）など、本市が有するスポーツのポテンシャルを活かし、スポーツを活用したまちづくりを積極的に推進している。

また、アニメ「ラブライブ！サンシャイン！！」は、市内の海沿いにある内浦地区の学校を舞台に結成されたスクールアイドルグループ「Aqours」の奮闘と成長を描く物語で大変人気のあるアニメであり、本市のまちづくりに欠くことができない重要なコンテンツの1つとなっている。TV 放送が開始されてからは、聖地巡礼で内浦地区の来訪者数は 20 倍に増加、民間ではフラッグ掲示やタクシーラッピング、特産品とのコラボ、沼津まちあるきスタンプなどの取組みがおこなわれ、行政では広報誌や SNS での広報、PR、ふるさと納税、コラボ事業が展開されている。

山﨑　善也　京都府綾部市長

文化芸術・スポーツで紡ぐまち・綾部

綾部市はグンゼ、日東精工、オムロン、京セラなど著名な企業を数多く有するものづくりのまちであるが、市民１人1文化・1スポーツを推進し、文化のかおるまちづくりとともに、スポーツの力で人とまちの活性化と都市との交流を深めている。

2011 年に京都府で初めての開催となった国民文化祭で「里山合唱フェスティバル」が開催され全国から数多くの合唱団体が集い熱演が繰り広げられた事を一過性のものとせずに、「合唱のまち・綾部」を持続的に推進した。さらに「綾部市民合唱祭」では合唱団あやべを編成し市長や教育長も加わり市歌などを熱唱した。このほか、児童や生徒が市の歌をうたう「ふるさと教育」をはじめ、「市民平和祈願の集い」「みんなであやべの歌を歌う会」などアイデンティティとして根付いている。文化芸術分野については高齢化や後継者難の課題に直面しており、入門から育成、発表、鑑賞の組合せ事業の推進をおこなっている。

次に、豊かな自然を活かしたスポーツによるまちづくりでは、サイクリング（あやべ里山サイクリング、グランフォンド京都）、カヌー、・トレッキング（二王門登山レース）など豊かな自然を活用したスポーツによるまちづくりにも努めている。2023 年４月の第 1 回あやべ水源の里トレイルランでは、綾部ならではの山海の景観を堪能、飽きることない多彩なコース設定に加え、エイドステーションでの地域住民との交流が新たなリピーターを呼び込むきっかけになった。また、支える側は遠来の参加者との交流がやりがいや元気の源となり、さらなる交流人口・関係人口の創出につながっている。

市民１人1文化を推進し、文化芸術とスポーツの所管を一体化させた市の政策や戦略が功をなしている事を確認しました。

② 質疑応答

コーディネーターおよびパネリスト、来場者より質疑応答がなされる。

（※特に気になったものを記載）

今川氏：アートの分野だけでは解決できない課題があること。やってる人だけで完結していては広がりがないなど。

松橋氏：公共性というものが伝わりきれていない。本質的な部分にフォーカスしながら、持続可能性を考えなければならないが、経済効果やコスパなどにフォーカスしがちなど。

頼重氏：市の取り組みがスポーツにフォーカスされすぎて文化芸術に弱い、やっていないとの意見がある。疎外されていると感じている市民がいることが悩まし

い。アニメについてはオーバーツーリズムが課題など。

小林氏:「文化施策は日常生活に必須なものではなく優先度が低いと受け止められているが、説得力の鍵は？」と問われ、「その自治体ごとに強みは違うので一概には言えないが、数値などの KPI だけで見てはいけない」との答えがあった。

●11時50分　閉会式

次期開催市市長挨拶　兵庫県姫路市長　清元秀泰

閉会挨拶　公益財団法人日本都市センター理事　奥山恵美子

感想

文化芸術とスポーツは都市の魅力と発展に欠かせない要素です。文化芸術は多様性を促進し、芸術的なエクスペリエンスを提供することで都市を豊かにします。同時に、スポーツはコミュニティを結びつけ、健康促進と活気ある雰囲気を醸し出します。この組み合わせは都市を魅力的な場所にし、住民や観光客に持続可能な活力をもたらすことができると感じました。